

第 8 回群馬臨床ウイルス研究会

日 時：平成 20 年 11 月 13 日 (木) 19:00~

場 所：マーキュリーホテル

代表世話人：石川 治 (群馬大院・医・皮膚科学)

当番世話人：岸 章治 (群馬大院・医・眼科学)

1. 先天性 CMV 感染症による重度感音難聴児に対する人工内耳の聴覚活用

中島 恭子, 長井今日子, 古屋 信彦

(群馬大院・医・耳鼻咽喉科・頭頸部外科学)

緒方 朋美, 大木 康史

(群馬大院・医・小児科学)

【はじめに】近年、我が国における妊婦の cytomegalovirus (CMV) 抗体保有率は低下傾向にあり、先天性 CMV 感染症の増加が懸念される。先天性 CMV 感染症は出生後難聴をきたすウイルス疾患としても知られていて、この難聴は生直後に明らかになる症例ばかりでなく、生後進行し遅発性発症の形をとることもある。今回我々は先天性 CMV 感染症による重度感音難聴に対し人工内耳埋め込み術を行った児 2 症例を経験したので報告する。【症例 1】3 歳 2 ヶ月, 女児。新生児聴覚スクリーニングで refer となり、近医にて ABR 施行したところ無反応なため 1 歳 5 ヶ月で当科受診。小児科で先天性 CMV 感染症と診断された。補聴器装用と言語訓練を開始したが、2 歳過ぎてても有意語の発語無く、補聴効果に乏しいため 2 歳 5 ヶ月時, 右耳に人工内耳埋め込み術施行。術前の聴力 (条件詮索反応 = COR と示す) は、平均 110.0dB であった。補聴器装用時の閾値は 80~90dB と補聴効果は極めて不良であった。人工内耳装着 7 ヶ月後の現在の閾値は 40~50dB と著明な改善を認めた。また、語彙数も手術直前は 80 程度であったが、術後は約 200 に増加した。【症例 2】9 歳 5 ヶ月, 男児。1 歳過ぎまでは音に対する反応があり、数個単語の発語もあった。2 歳頃より音への反応が悪く、発語が全くなかったため 2 歳 1 ヶ月時当科受診。ABR, COR で約 100.0dB 前後の重度難聴を認めた。MRI で脳の白質病変を認めたため、小児科紹介。血液検査、髄液検査で先天性 CMV 感染症と診断され、それによる難聴の進行で重度難聴になったと判断された。早急に補聴器装用と言語訓練を開始し、当初は補聴器装用閾値が 50.0dB まで改善を認めた。3 歳過ぎて難聴が更に進行したため 3 歳 5 ヶ月で人工内耳埋め込み術施行。現在の人工内耳装着時の語音明瞭度は 62% で、日常生活にお

ける会話聴取は良好であり普通小学校に通っている。

【まとめ】先天性 CMV 感染症による重度感音難聴に対する人工内耳埋め込みは、認知面の遅れがなければ良好な聴覚活用が期待できると思われた。

2. 2007 年のウイルス性髄膜炎 一小児科入院患者についての検討一

井上 文孝, 田中 健佑, 三原 大輔

後藤 智紀, 柴 梓, 清水真理子

鈴木 道子, 松井 敦

(前橋赤十字病院 小児科)

当院小児科では 2007 年に生後 3 ヶ月未満児を中心としたウイルス性髄膜炎の流行を経験した。2007 年に 24 人のウイルス性髄膜炎患者の入院があり、これは 2006 年の 10 人、2008 年 10 月までの 14 人と比較して多く、その大部分が生後 3 ヶ月未満の新生児・乳児だった。2007 年のウイルス性髄膜炎患者の原因検索を行ったところ、ウイルスが分離できた症例は 4 例全てがコクサッキー B5 型によるものだった。群馬県内では東毛地区の桐生厚生総合病院でも同様に生後 3 ヶ月未満のコクサッキー B5 型ウイルス性髄膜炎患者が多く入院していたことがわかった。2007 年全国の成人も含めた全年齢でのウイルス性髄膜炎についての統計では、原因ウイルスとしてコクサッキー B5 型が 40.0% と最も多くの割合を占めていたものの、患者の発生数は平年と比較してむしろ少なかった。そのため、同年に発生したコクサッキー B5 型によるウイルス性髄膜炎は生後 3 ヶ月未満児に限り、他の年齢層と比較して例外的に多くの患者が発生した可能性がある。1995、1996 年の疾患統計によると、コクサッキー B3 型、B4 型、B5 型のウイルス性髄膜炎が 1 歳未満の乳児、特に生後 3 ヶ月未満児に多いことがわかった。2007 年の流行もこの年齢分布に合致していると考えられる。エンテロウイルス属の中でも、コクサッキー B 型ウイルスは 1 歳未満の乳児に髄膜炎を引き起こしやすい可能性が考えられた。今後も同ウイルスの流行時には乳児の髄膜炎に注意が必要である。